

お別れの言葉

吉岡 曠

徳川君、あなたはまさに忽然と逝ってしまいました。凶体が大きいだけではなく、強烈な存在感のある人でしたから、私どもの喪失感も限りなく深いのです。心の中にぽっかりと穴が開いてしまったような気がします。この穴はあの世であなたにめぐり会ってふさがるのでしょうか。

徳川君の人生を思うと、あれほど勝手気ままに、好き放題に生きて、言いたい放題のことを言っていて、ぽっくりと死んで、こんな幸せな奴はいないと、一応いえるかもしれません。奥さまも葬儀の際の御挨拶で、あの人は次男坊で、天真爛漫で、電話などで話していることを横で聞いているとはらはらしたとおっしゃいました。しかし、徳川君が天真爛漫だけの人物ではないことは、奥様や御遺族をはじめとして、徳川君に接した誰もがよくわかっていたことだと思いません。陽気で、磊落で、わがまま勝手で、直言居士で、などといった印象のうしろに、人に対する心くばりや、やさしさ、自分自身に対するきびしい心がまえ、自らをいましめる心を持っている人だということは、誰しもが感じ取っていません。だからあなたは誰からも愛されました。

私は葬儀場で、何人もの人から、彼は照れ屋だったからという言葉を聞きました。確かにあなたは照れ屋だったと思います。しかし、どうもそんなことだけではないという気がしてならないのです。

あなたが亡くなってから、あなたのことが頭から離れないのですが、実をいうと、あなたに死なれてから、あなたの

ことがわからなくなりました。これから言いますのは、私の想像といいますが、徳川宗賢研究の中間発表、いつ白紙にもどしてもよい、かりそめの発言です。

あなたは、ずっと昔、幼少の頃から、人生の根源的な淋しきというものを感じ続けてきたのではないのでしょうか。あなたのパーフォームンスは、すべてその淋しさに発する、あるいは淋しきに対するものではなかったのでしょうか。

私がそう思うのは、学習院大学では月二回教授会があり、その後、科会があつて、かなりおそくなつてお腹もすくので、その辺の飲み屋や食べ物屋で、何人かで食事をしてお酒を飲みます。あなたと私とはその常連で、つまり、あなたと私とは、この六年間、少なくとも月に二回は一緒にお酒を飲む機会があつたわけです。この時間が私にとってはオアシスでしたが、たわいないおしゃべりをしながらふとあなたの目を見る、その時のあなたの目のやさしさといいますが、私を包みこむような眼ざしは、あえて淋しきとは限定しませんが、人生の何か根源的なものに触れた人間でなければ持ちえない眼ざしではないかと、今にして思うのです。

私はこの眼ざしの意味といいますが、由縁を理解しない限りあなたへの弔辞は書けないと思つて、この一箇月あまり一生懸命考へたのですがよくわかりません。わからないまま、このお別れの言葉の原稿を書くことになりました。

奥様が御挨拶の中で、徳川は、早く死にたいと申しておりましたと、ふとおっしゃいました。何人かの同僚も同じ趣旨の言葉を聞いたことがあるそうです。あなたは視野の広い人でした。先見性のある人でした。自由な物の考え方のできる人でした。人のためにやつてやりたい精神の旺盛な人でした。そして実行力のある人でした。そういうあなたが、あなたについていけない人たちに対して、たえずいららしていたであろうことは容易に想像できます。そういうあなたが様々な荷物を背負いこむことになることも、あなたのさがとはいえ、いたしかたのないことです。常人では背負い切れない荷物を背負つて生きていたあなたが、時に、何もかも放り出してしまいたいという気分になつたのは当然といへば当然です。しかし、あなたは最後までその重荷を背負い続けてきました。

私は、中村隆子さん、研究室の副手を勤めたあと、六年間徳川君の仕事の手助けをし、今回のことでも、御遺族と連

絡を取りながら、我々のしなければならぬ一切の中心になって取り仕切ってくれた女性ですが、その中村さん、現姓濱口さんから、私は次のような話を聞きました。

三年ほど前、あなたは、一通の封書を机の上に放り出して、中身を読んでくれといったそうです。読んでみると「本日は御会葬有難うございました」で始まる遺書みたいなものだったのだそうです。そして、これは鞆の中に入れておくから、もしもの時にはその所在を家族に知らせてくれといったそうですが、何と今回、その文書が鞆の底から出てきたんだそうです。あなたは、この三年間、どこへ行くにもカバンと一緒に遺書を持ち歩いていたことになりました。

これは、あなたが、その頃から死を予感していたというようなことではおそろくないでしょう。むしろ、自分にできる、人のために役に立つことなら何でもやってやろう、何でも引受けてやろう、そのための重荷は死ぬまで背負い続けていこう、重荷を背負っていつどこで倒れてもかまひはしないという覚悟の、時として死にたいなどという弱音をばく自分に對してのいましめの改めでの表明だったのではないかと思えます。あなたが時折見せたあの深い眼ざしは、そういう覚悟を定めた男が持つ、心の落着き、やさしき、慈愛の表情だったのだらうと思えます。そしてこれは、あなたの生の根源的な感情と、遠く、かつ一直線につながるものだったらうと思えます。(しかしこれは、先にも申しましたように一応の答案に過ぎません)

私はあなたとは五十数年來の友人で、思い出をのべ出したら切りがありません。一つだけ申し上げましょう。

旧制高等科の時に岩田九郎先生という俳文学の先生がいらっしやって、来週までに俳句を作つて来いという宿題が出ました。しばらく経つてこのあいだの俳句の中でいい句が二句だけあつたとおっしゃつて黒板にお書きになりました。その中の一句があなたの句で、私は今でも鮮明に覚えています。

秋の風広きお寺を吹きにけり　このお寺は寛永寺ではないでしょうか。

私はこれからもあなたのことをしばしば、あるいは時折、思い出すでしょうが、その度にあの何とも言いようのなかつたやさしい眼ざしは何だったのかと、考え続けることになるでしょう。

背中
の荷物を
おろした
今、安ら
かにお休
み下さい
。安らか
にお休み
になって
いること
でしょう
。

平成十一年七月十七日